

〈創立 130 周年記念礼拝説教〉 2013 年 11 月 24 日

この地上に永続する場所はないけれど！

出エジプト記 33 章 7～11 節    ヘブライ人への手紙 13 章 7～16 節

武 田 真 治

## 1、信仰の先達を思い出しなさい

本日の礼拝が教会創立 130 年の記念の時です。思えば、いかに多くの信仰の先輩方がこの教会のために、そしてこの地域のためにたくさんの汗を流して来られたことか、計りしれないように思います。その歴史の重さを感じつつ、感謝とともに今日の聖書の言葉をご一緒にかみしめたいと願っています。

即ち「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰に見倣いなさい。」(7 節) です。

ここでの「指導者」とは、単に牧師や聖書の教師のことを指しているのではありません、もっと広く信仰の先輩たちの事を考えてよい言葉です。原文の語順では「あなたがたは指導者たちのことを忘れないようにしなさい。彼らはあなたに神の言葉を語っていた」となります。信仰の先達（せんだつ）の方々の顔かたちや面影を忘れないようにということではなく、彼らの信仰に基づく生涯について目を留めよと。特に、彼らは私たちに神様の言葉を語り掛けて下さっていたという事を忘れないようにという意味になります。なるほどと思います。

ただ、それでも「彼らの生涯の終わりをしっかり見て」信仰に見倣えとまで言われると、私のような生半可な信仰者は、自分の「生涯の終わり」は自分でもどうなるか分かりませんし、自信がありませんので、そんなに「しっかり見られても困る、だいたいのところで勘弁して下さい」と思わず言ってしまいます。このヘブライ人への手紙の著者はいったいどのような思いでこの言葉を語っているのでしょうか？

## 2、「キリストは変わらない」

その点で考えさせられるのが、この次の節の言葉です。それは「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です」(8 節)。信仰の先達者たち

のことを語っていたのに、急にイエス様のことについて、しかもそのイエス様が「変わらない方」であることに目を向けるようにと促されているのです。この続き方には何か意味があるのでしょうか？

実は「イエス様が変わらない」という言葉には一つの前提があります。それは「人も世の中も変わる」ということです。

従って、この手紙の著者は決して「指導者たちの生涯の終わり」がみんな人間的にすばらしかったから「しっかり見て」と語っているのではないことが分ります。むしろ、その先輩たちの生涯がどうであろうとも、その生涯を貫いていることは主イエスの導きであり、支えであったと、彼らの傍らにずっとイエス様が共に居続けていて下さったことは「変わらなかった」と見ているのです。だから読者（＝私たち）にも、先輩たちの最期の最期まで、主が共に居て下さったという事実を「しっかりと見て」ほしいと願っている言葉なのです。

### 3、信仰とは何の上立つのか？

私は、私たちの信仰の拠って立つべき所がまさにここにあると思えるのです。それは「キリストが変わらない」お方であるということであり、だからこそ、私たちの信仰も成立するのです。

もし、逆に、私たち人間の側の確信の強さや正しさに拠って、信仰が成り立っているのであるならば、これ程、不安定な、あやふやなものはありません。そのような私たちの確信や信念の強さの上立っている信仰などはとうてい当てに出来ません。なぜならば、先程も触れましたように「人も世の中も変わる」からです。移り変わって行くものを頼りにして、その上にしっかりとした信仰など、成立するはずがないからです。私たちの思想や考え方、生き方さえもその時々、場面場面によって、揺らぎ、腰砕けになるものです。

しかし、そのように私たちに移り変わってもイエス様はずっと共にいてくださり、私たちがそのイエス様に気付くことを、変わらず「待っていて下さる」のです。あの『ほうとう息子』の譬えの父のように、帰ってくるであろう息子を信じて待ち続けていて下さる、そのようなイエス様が共に居て下さるという事を、私たちは「信じる」

ことが出来るのであって、信じられる根拠は私たちの側にはありません。しかし、私たちがどう変わってしまっても「キリストは変わらない」。だからこそ信じられるのです。この信仰の上に立っているからこそ、この手紙の著者は「彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰に見倣いなさい。」と言いつけることが出来るのです。

#### 4、「宿営の外に出て、みもとに」

その変わらないキリストと出会う場所が「宿営の外」だと著者は続けます。

即ち「だから、わたしたちは、イエスが受けられた辱めを担い、宿営の外に出て、みもとに赴こうではありませんか」(13節)と。

この「宿営の外」が何を意味するかは、先程読みました旧約聖書の出エジプト記 33章 7節以下に記されています。そこには「臨在の幕屋(=神様と出会う場所・会見の幕屋)」があったのです。モーセを初め、人々はわざわざ「宿営(=人々が寝食を共にしている場所)」を出て、臨在の幕屋まで行き、そこで神様に祈り、神様からの示しや言葉を受けたのです。これはまさに現代で言えば、「教会の礼拝」という場所のことではないでしょうか。ですから、この後ヘブライ人の手紙の著者も「だから、イエスを通して讃美のいけにえ、すなわち御名をたたえる唇の実を、絶えず神に献げましょう。」(15節)と勧めているのです。

逆に言えば、教会のこの礼拝の場所は「宿営(=私たちが寝食を共にしている場所)の外に」あるものなのです。日常の生活や普段の生活の場からは「外に」ある場所であり、空間であり、時間なのです。なぜなら、ここは「来るべき都」(14節)に通じている場所だからです。だからこそ神様に出会えるのです。この礼拝の時間が、私たちの日常から(=この世)から出て、御国に通じる時と場所なのだという、この認識は私たちが欠いてはならない、すべてのことの根本にあることなのです。

ある教会の礼拝堂には、説教をする講壇の上に、梯子(はしご)のモニュメントが置かれているそうです。それはここが天と通じている、天への梯子がある場所だということ象徴しているのだそうです。その梯子を通して、神様が私たちの上に降りて来て下さる、聖霊を降して下さるのです。(説教より抜粋)